AAR のシリア難民・避難民支援のご報告

忘れられた危機下の人々へ支援を届けています

シリア紛争が 2011 年 3 月に発生してからもうすぐ 13 年が経ちます。次々と起こる世界のニュースに押され、メディアに取り上げられる機会も少なくなりましたが、シリアの人々の危機的な状況は依然として続いています。国際連合によると、紛争によりシリアから国外に逃れた人々は 2023 年 12 月時点で約 512 万人、シリア国内で人道支援を必要とする人々は約 1,530 万人にのぼり、この数は日本の人口の約 1/6 に相当します。

AAR Japan［難民を助ける会］は、2012 年から隣国トルコへ逃れた方々への支援を、2014 年からはシリア国内で避難する方々への支援を開始し、食糧配付、障がい者支援、教育支援、コミュニティセンターの運営などさまざまな活動を行ってきました。

現在は、昨年 2 月にトルコとシリアで起きたマグニチュード 7.8 の地震により被災したシリア難民への支援も行っています。

紛争と地震による二重の苦しみ

支援物資を被災者へ届ける AAR スタッフ

「地震で 7 歳の息子をなくしました」。辛そうに話すナイマンさん（43 歳　女性）は、夫と 5 人の子どもとともに 2015 年にシリア紛争を逃れるためトルコのアディヤマン県に移り住みました。地震により借家が倒壊し、一時は家族全員が数時間瓦礫の下に閉じ込められました。なんとか救助されましたが、息子は亡くなり、夫は手術を受け病院で 2 週間過ごした後、現在はテント暮らしが続いています。夫はケガのため仕事ができず、収入源がない中で AAR による食料や衛生用品などの支援は「本当に助かります」と喜んでくれました。

地震で被災したナイマンさん一家から話を聞く AAR スタッフ

雨の中、食べものも寝る場所もなく

メナルさん（34 歳女性）一家は子どもが 8 人いる 10 人家族です。メナルさんもナイマンさん同様、2016 年にシリアからアディヤマン県に移り住みましたが、地震により借家が損

壊し、何日も雨の中で路上生活を続けたそうです。「地震は本当に怖かったです。やっとのことで子どもたちと外へ逃げましたが、外は雨が降っていて食べ物もなく、寝ることもできませんでした」と当時の様子を話してくれました。その後、テントを得て４ヵ月間生活しましたが、コンテナハウスには入居できず、現在は震災で少し損傷した借家に住んでいます。メナルさんの夫は地震の後職を失い、現在は定職ではないものの、ときどきちょっとした仕事を見つけることはできているそうです。「将来の見通しはまったく立っていません。AAR からの支援は心の支えになります」と、物資を嬉しそうに受け取ってくれました。

寒空の中、支援物資を受け取り喜ぶメナルさん一家。右端は AAR スタッフ

AAR は、トルコでこうしたシリア難民の被災者支援をはじめ、難民の方々をサポートする現地 NPO への支援を行っています。また、シリア国内では、食料が行き届かない避難民キャンプへの食料配付や、内戦で打撃を受けた小規模農家への種子提供などの支援を行っています。世界的なインフレに伴い食糧・生活必需品の価格が高騰し、種子と肥料の価格も倍増しています。シリアも例外ではありません。

「私たちを忘れないで」

世界のニュースは日々変われども、シリア内戦も、危機下の人々の苦しい状況も続いています。私たちが支援に出向く先で、こんなメッセージを受け取ります。「どうか私たちを忘れないでほしい」。私たちと同じ時代を必死に生きながら、過酷な状況にある人々のために、AAR は今後も支援を届けてまいります。